

○小西 史子 黒川 衣代*

（佐賀大、*大阪市立大・院）

目的 孤食の増加をはじめとする食生活の変化が、児童・生徒の心身の健康に与える影響が近年問題になっているが、この変化には家族関係が少なからず関与しているものと考えられる。そこで本研究では、食事内容や食事のとり方が家族機能とどのような関連を示すのかを明らかにすることを目的とした。第1報では、まず食事内容と食事のとり方の関係を調べたので報告する。

方法 佐賀県の中学1・2年生523名（男子257名、女子266名）を対象に、質問紙による調査を行った。調査時期は1996年11月、回収率は100%、有効回答率は99%であった。質問項目は、食物摂取頻度調査法による食事内容、朝食と夕食の食べ方（孤食、個食、会話の頻度、テレビの視聴の頻度、家族が揃う頻度）である。食事内容はその内容によって点数化し、点数が高いほど、食事内容がよいことを示すように表し、食事内容と朝・夕食の食事のとり方の各項目について相関を調べた。

結果 朝食と夕食のとり方の全項目と、食事内容との間に有意な相関が認められた。特に夕食のとり方との相関係数は朝食のそれより高く、なかでも会話の頻度と食事内容との相関が最も高い値を示した。また、会話の頻度と家族が揃う頻度の間にも有意な相関が認められた。朝食のとり方と夕食のとり方の間にも有意な相関が認められ、朝食のとり方と夕食のとり方は個々に独立したものではなく、関連していることがわかった。